

埴輪の絵

Pictorial Representations on *Haniwa* Clay Cylinders of the Kofun Period

春成秀爾

はじめに

- ①埴輪の絵の題材
- ②埴輪の絵の特色
- ③埴輪の絵の意味

【論文要旨】

3～6世紀の古墳に立てた埴輪のうち、4～6世紀のとくに円筒埴輪に、数は少ないけれども絵を描いた例がある。鹿と船がもっとも多く、鹿狩りをあらわした絵もある。それ以外の絵はとるにたらないほどであるけれども、そのほかに記号風の表現がある。鹿と船の絵は弥生時代、前1世紀の土器にしばしば描かれた。しかし、それらは1～2世紀になると記号化し、3世紀になると消滅していた。

弥生土器と埴輪の画風とはよく似ている。それは、どちらも原始絵画に共通する多視点画・イメージ画だからである。弥生土器が農耕の祭りに使ったのに対して、埴輪は亡くなった首長など支配者の墓に立てるものである。鹿狩りの絵は弥生土器が神話のなかの狩人を描いているのに対して、埴輪のばあいは被葬者の首長を描いているのであろう。西日本の弥生遺跡から鹿の骨が発掘されることは少ない。稲作を始めた弥生時代には、鹿を土地の精霊とみなし、狩ることを制限していたのであろう。それに対して、埴輪の絵から推定すれば、古墳時代になると、首長だけは鹿を狩る資格をもっており、土地の主を殺すことは、その土地を奪うことを象徴的にあらわしていた、と考える。

その一方、奈良県東殿塚古墳（4世紀）の埴輪に描いてある絵の船は、舳先に鶏がとまって水先案内役をつとめている。鶏は朝を告げる神聖な鳥である。被葬者を日つまり生の世界に導くために船にのせているのだとすれば、この時期には被葬者の再生を願う観念があったのかもしれない。九州の6世紀の古墳壁画には、太陽の照る日の世界から、月がでている夜の世界に向かって被葬者をのせた船が航行していく様子を描いている。近畿と九州、4、5世紀と6世紀とのあいだには、違う死生観が存在していたのであろう。